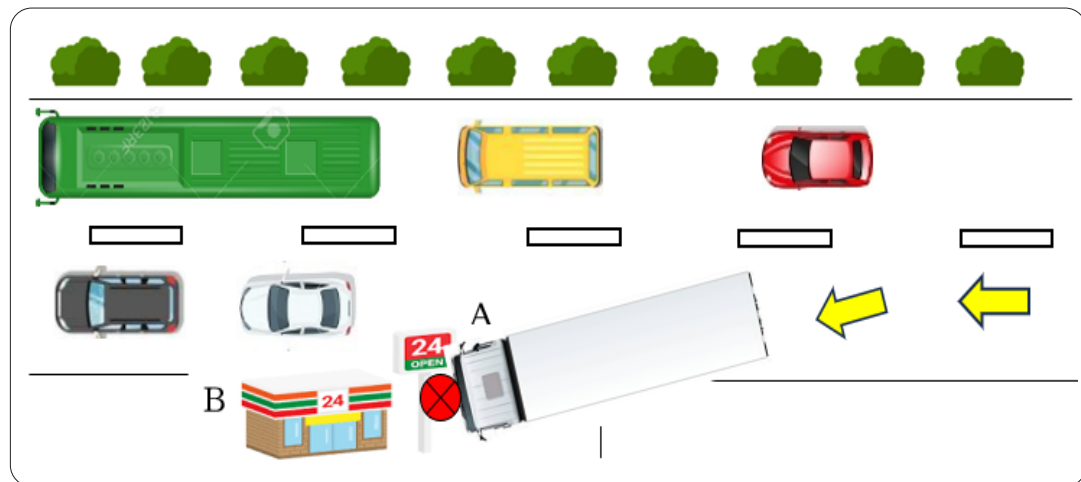


職場における交通安全指導

Part 145

病気により、運転に支障をきたし、大型貨物車が路外施設に衝突



■事故の概要

- 事故の当事者
当事者A（大型貨物車）：60歳代、男性
当事者B（コンビニエンスストア）
- 被害状況
A：重傷（心筋梗塞、左下腿部打撲等）
大型貨物車（車両前部中破）
B：外壁大破
- 道路状況
片側2車線の一般市道

事故状況

Aは入社して3年ではあるが、前職でも大型貨物20年の乗務経験があるベテランのドライバーで、長距離の輸送を担当している。

Aは、入社して3年間、健康を害して休んだこともなく、無事故無違反で真面目に仕事をこなしていた。しかし、定期健診では、毎回、血圧やコレステロール値、血糖値も高く、医師からも食生活を改めるように注意されていた。

事故当日は、物流センターから商品を積み込み、県内の量販店に向けて搬送している途中であった。

この日は、出発前から左肩から背中にかけて「コリ」があったが、運転には支障がないだろうと判断し、運転を開始した。

渋滞もなく順調に走行してきたが、左肩から背中にかけていつになく「コリ」が強くなってきたので、広い駐車場のあるコンビニエンスストアを探して休憩を取るつもりであったが、思いうるような休憩場所を探せないまま、発進・停止、ノロノロと低速走行を繰り返していたところ、突然、背中に痛みを感じ、前を見て運転することが出来ず、気が付いたら路外のコンビニエンスストアに衝突していた。

その後、救急車で病院へ救急搬送されたが、心筋梗塞と診断され緊急手術することとなった。

事故の原因

事故の原因は、Aの心筋梗塞による発作の影響で運転操作に支障をきたし、前方注視を怠ってしまったことです。

安全指導

近年、運転中に心筋梗塞、くも膜下出血などが発症したため、運転に支障をきたし大事故になってしまったというケースが増えています。

健康起因事故を起こす要因の疾病として、「心臓疾患」「脳疾患」等がありますが、その根底にあるのは普段の生活習慣や職場の環境が大きく影響しています。

トラック運転手の健康起因事故を防ぐため、運行管理者や事業者による徹底した安全指導が必要であり、特に40歳以上のドライバーはリスクが高く、食事・運動の生活習慣改善指導が重要と考えられます。

①健康起因事故の主な疾病

運転中に意識喪失や心停止を引き起こし、運転に支障をきたすなど、重大な交通事故につながるリスクが高い疾病は以下の通りです。

- 心臓疾患（約50%超）：心筋梗塞、心不全、狭心症
- 脳疾患（約15%）：脳梗塞、くも膜下出血など
- 大動脈瘤及び解離（約10-15%）：大動脈瘤の破裂など
- 睡眠時無呼吸症候群(SAS)：運転中の強烈な眠気、突然の意識喪失
- その他：糖尿病の低血糖発作、てんかんなど

②疾病発生の主な要因

生活習慣病（高血圧、糖尿病、脂質異常症）の放置、睡眠不足、過度なストレスがこれら疾患の悪化・発症の根底にあります。

③具体的な対策

【運行前・運行中の体調管理の徹底】

- 乗務前後の点呼での健康チェック
顔色、声のトーン、自覚症状を口頭で確認しましょう。
- 体調不良時の即時申告・停止
少しでも体調に不安がある場合、無理に運転を継続させず、直ちに運行管理

者に報告し、安全な場所に停止するように指導しましょう。

- 「迷惑がかかる」という意識の払拭
代わりはないからと言い出せない雰囲気を作らず、体調不良を申告しやすい環境を構築しましょう。
- 休憩の自発的な取得
疲労を感じる前に休憩を取り、こまめな水分補給やストレッチを行うように指導しましょう。

【日常的な健康管理（自己管理）の指導】

- 生活習慣の改善
睡眠、食事、運動のバランスを見直させ、高血圧や肥満を改善するなど、コンディションを整えさせましょう。
- 血圧・睡眠の管理
脳・心臓疾患を防ぐため、日頃からの血圧測定や睡眠時無呼吸症候群(SAS)が疑われる場合は速やかに受診させましょう。

これら健康起因事故は、「自動車事故報告規則」に基づき30日以内に報告が義務付けられている重大な事故であるという認識を共有し、健康管理に努めることが、安全運転に繋がるということを再確認してください。

